『類音』所収の旧音注について

浦　山　あ　ゆ　み

一

遂初堂本『類音』八巻は，「音論」一巻・「図説」一巻・「切音」一巻・「韻譜」五巻より構成される。本稿では主に『類音』のなかでも大半を占める「韻譜」の音義注の部分，具体的には所収の各文字の下に「旧〇〇切」と記された部分のみを取り上げる。該当部分はどの韻書（或いは音系）を参照したのかが分かる箇所である。著者潘耒がどのような書物を基にして『類音』を編んだのか，それを検討してみようと思うのである。

二

「韻譜」中に記された旧音注は主に以下の３パターンに分けることができる。[1]

A　「旧〇〇切△韻」類

B　「旧〇〇切従集韻増」類[2]

C　その他

最も多いのがAで3802例，続いてB47例，C６例である。それぞれ内訳を表にまとめると以下のようになる。

	平　声	上　声	去　声	入　声	合　計
A	1128	920	1081	673	3802
B	22	12	13	0	47
C	1	2	3	0	6
合計	1151	934	1097	673	3855

A類を概観したところ，「旧〇〇切」（以下，旧切と呼ぶ）部分および「△

韻」という韻目はそれぞれ『広韻』のものと一致しており，一方，B類の旧切は言うまでもなく『集韻』の反切より引用したものと見受けられる。C類は例外的扱いのものである。[3]

以上のパターンを一見する限りでは，『類音』所収の旧切のほとんどは『広韻』から引用され，『広韻』未収の文字（あるいは音）もしくは『集韻』による増加小韻がBとして付け加えられた――そう判断して良さそうに見えるのである。

三

しかしながらBの内容を仔細に検討してみると，実際には『集韻』に見られない見出し字および反切が散見される。[4]その数は10例である。この数字をどう見るかは微妙なところではあるが，必ずしも『類音』が『集韻』に依拠しているとは断定しえない例と考えてもよいのではないだろうか。そこで試みにB類の旧切を『五音集韻』と照らし合わせてみると，よく一致していることが分かる。[5]

『集韻』とのみ一致する	2
『集韻』『五音集韻』両方と一致する	33
『五音集韻』とのみ一致する	9
どちらも一致しない	3
合計	47

このうち「『集韻』とのみ一致する」のは次の2例である。

	『類音』		『集韻』		『五音集韻』	
	見出字	旧切	見出字	反切	見出字	反切
ア	呯	旧彌嗟切	哔	彌嗟切	哔	弥嗟切
イ	臏	旧逋忍切	臏	逋忍切	臏	徧忍切

アの「彌」と「弥」は異体字の関係にあり，実質的に同じ文字である。また，イの『五音集韻』反切上字「徧」は，寧忌浮氏によると別の版本『崇慶新彫改併五音集韻』では『集韻』と同じく「逋」であるという。[6]つまり『類音』の旧切B類のうち『集韻』とのみ一致し，『五音集韻』とは一致しない例はたった1つのみ，しかもそれは版本によっては全同となるのである。

つぎに「どちらとも一致しない」のは3例あり，以下のごとくである。

	『類音』		『集韻』		『五音集韻』	
	見出字	旧切	見出字	反切[7]	見出字	反切
ウ	翗	旧巨舸切	—	——切	翗	巨何切
エ	翫	旧僕蒙切	徫	樸蒙切	徫	穙蒙切
オ	犥	旧叵倒切	犥	叵到切	犥	叵到切

ウの見出し字「翗」は『集韻』未収字で，なおかつこれに該当する反切の文字が見られない例である。「翗」は『類音』平声十一類所収字であり，『類音』の反切下字が上声字の「舸（『広韻』では古我切，『類音』では岡奇切）」であるのは不審である。[8] エの見出し字「翫」は『集韻』には見えないが，『五音集韻』には見られ，見出し字「徫」の下に収められる文字である。またエ・オの反切用字はそれぞれ『広韻』によれば「僕・樸・穙」「倒・到」とも同音字であり，字形（へん）の差異のみである。

最後に「『五音集韻』とのみ一致する」のは以下の9例である。

	『類音』		『集韻』		『五音集韻』	
	見出字	旧切	見出字	反切	見出字	反切
カ	臞	旧乃邪切	—	——切	臞	乃邪切
キ	貊	旧作何切	—	——切	貊	作何切
ク	艱	旧口恩切	—	——切	艱	口恩切
ケ	炊	旧口斤切	—	——切	炊	口斤切
コ	鰶	旧徐垢切	—	——切	鰶	徐垢切
サ	頓	旧丁本切	—	——切	頓	丁本切
シ	鑾	旧力華切	—	——切	鑾	力華切
ス	岸	旧牛仲切	—	——切	岸	牛仲切
セ	鱷	旧奴東切	鱷	奴冬切	鱷	奴東切

カ～スは全て『集韻』未収字かつ該当する反切が見られない例である。唯一セのみ『集韻』に見られるが，反切下字が異なっている。この「東」と「冬」は潘耒の当時においても同音であったと思われるが，少なくともこれが偏旁の相違でないことは明らかであり，誤字や誤刻とは考えにくい。

四

『五音集韻』所収反切のほとんどが『広韻』から引用されていることはすでによく知られている。[9] 上記の如く『類音』のB類に属する旧切が実は『集韻』ではなく『五音集韻』による可能性がある以上，一見『広韻』反切と類似しているように思われる『類音』A類の旧切も，実は『広韻』そのものからではなく『五音集韻』から孫引きされたのではないかという疑念を抱かざるをえない。したがってその点をも検討する必要が生じるであろう。

水谷1983は，『五音集韻』と『広韻』の反切を比較し，互いに一致しない反切用字を対照表にまとめた論考である。これに依拠して『五音集韻』『広韻』で異なる反切と，『類音』A類の旧切を比較調査した。以下がその結果である。[10]

『類音』Aの旧切のうち『広韻』とのみ一致するもの	193
『類音』Aの旧切のうち『集韻』とのみ一致するもの	0
『類音』Aの旧切のうち『五音集韻』とのみ一致するもの	2
『類音』Aの旧切のうち『広韻』『集韻』と一致するもの	49
『類音』Aの旧切のうち『集韻』『五音集韻』と一致するもの	1
『類音』Aの旧切のうちいずれとも一致しないもの	6
『類音』にみられないもの	3
合計	254

「『五音集韻』とのみ一致するもの」2例は具体的には次のものである。

	『類音』		『広韻』	『五音集韻』	『集韻』
	見出字	旧切	反切	反切	反切
ソ	跬	旧丘癸切	丘弭切	丘癸切	犬縈切
タ	狒	旧扶沸切	扶涕切	扶沸切	父沸切

また，「『集韻』『五音集韻』と一致するもの」は以下の1例のみである。

	『類音』		『広韻』	『五音集韻』	『集韻』
	見出字	旧切	反切	反切	反切
チ	溢	旧芳問切	匹問切	芳問切	芳問切

タの『広韻』反切下字は誤字であり（『王仁昫刊謬補缺切韻』では「沸」であ

る），あるいは意図的に従わなかったのであろうか。『類音』旧切のうち『五音集韻』からの孫引きと思われる例は以上の３つである。一方，『広韻』と一致するもの（つまり「『広韻』とのみ一致するもの」と「『広韻』『集韻』と一致するもの」の合計）は242にものぼることから，やはり『類音』Ａ類の旧切のほとんどが『広韻』そのものによると考えられる。

五

以上をまとめる。まず，『類音』の旧音注は主に『広韻』から引用されたと考えられる。『広韻』未収の文字については『集韻』に基づいて増加する形をとるが，実際には『集韻』未収の音注を10例も採用しており，この10例は『五音集韻』より引用した可能性が高いのである。

しかし，『類音』の「韻譜」およびそれ以外の部分においても『五音集韻』の書名は一切見えず（勿論『集韻』という名称は見られる），潘耒が『五音集韻』を参照したと思われる証は，この旧音注以外には見い出し得ない。確かに『洪武正韻』を『正韻』，『古今韻会挙要』と『韻会』と呼びならわす例もあり，また『類音』の中でも『正韻』『韻会』と称していることから，『五音集韻』を『集韻』と略称した可能性も否定はできないが，他書においてそう記されている例を筆者は寡聞にして知らない。

いわゆる『四庫提要』の「五音集韻」の項目には，

所収之字，大抵以廣韻爲藍本，而増入之字，則以集韻爲藍本。

という。[11] これと同様の考えが潘耒の念頭にもあり，『五音集韻』に見られる増加文字の全てを『集韻』によるものと見なしてしまったのであろうか。このことは当時における『集韻』『五音集韻』の利用状況等とともに慎重に論じられねばならない。また，『五音集韻』の中で『集韻』によらない増加小韻は，果たしてどういう性質を持つものなのかも考慮されねばならないであろう。

仮にもし，『類音』が『広韻』と『五音集韻』に依拠して編まれたとすれば，つじつまが合わないこともない。潘耒が『五音集韻』の等韻学的性格を応用して，整然とした理論的な音系を作り出そうと試みた可能性も考えられなくはないからである。しかしこれも『類音』音系そのものにどれほど『五音集韻』の影響が見られるかをも併せて検討する必要がある。

もちろん，この他にも様々な可能性が考えられるはずであるが，現段階では独断的な結論を下すことは避け，ここにしたためて博雅の御示教を乞うこととしたい。

註

(1) 但し，印刷が不鮮明で文字が判別しがたいものは除く。又音，又切は含まない。

(2) ただ単に「旧〇〇切，従集韻増」と記されたものだけでなく，例えば『類音』巻四の十五葉表「儸　列耶切，倦儸健而不徳也。旧利遮切。囉　囉嗹多言。臝　驢腹下肉。三字従集韻増。」のように，下の文字にまとめて「二字従集韻増」「三字従集韻増」と記された旧音注も含む。

(3) その他6例は以下のとおり。①「頑　従集韻増」のみで旧切が記されないもの，②「黷　旧黯去声」③「拯　旧無切，音蒸上声」④「打　古音頂，従今音増入」⑤「富輻…（略）　十字注見十三漚，旧宥韻，従今音増」⑥「婦　注見十一嘔，旧有韻，従今音増」のように反切でないもの。

(4) 『集韻』は北京図書館所蔵本影印（『宋刻集韻』中華書局1988）を底本とし，異同が見られる場合には上海図書館所蔵本影印（『集韻』上海古籍出版社1985）をも参照した。

(5) 寧忌浮『校訂五音集韻』（中華書局1992）を底本とする。なお，『広韻』は沢存堂本を利用した。潘耒自身が序文をよせているからである。

(6) 同上『五音集韻』所収「成化庚寅重刊改併五音集韻校訂記」33頁。

(7) 「－　－－切」は未収字かつ該当する反切が見られないものを表す。以下同じ。

(8) しかも韻譜に対応する『類音』巻三「切音」の韻図では，「翃」字の反切が「巨何切」となっており，「舸」という反切下字はおそらく過ちであろう。

(9) 例えば『中国語学新辞典』（中国語学研究会編　光生館1969初版　いま1987第7刷本による）の「五音集韻」（212頁）。『五音集韻』と『広韻』の関係について言及した文献は少なくないが，ここでは代表的なものの一つを掲げておく。

(10) 水谷1983に挙げられる反切の中で若干数が筆者の調査とは異なる。これはおそらく採用底本の相違によるか，もしくは論文印刷の際の手違いによるものであろう。うち2例（「松　祥容切」「丑　敕久切」）は『広韻』『集韻』『五音集韻』三本とも全同となる反切なので，本稿ではカウントしない。また，「蠕」と「苗」は『広韻』『五音集韻』ともに「蠕　火媧切」「苗　武瀌切」で一致するので，やはり本稿では数に入れない。

(11) 『四庫全書総目』（中華書局1987第4次印刷362頁）。なお『四庫提要』の「五音集韻」の条に関しては，大岩本2000に詳しく検討されている。

〈参考文献〉

趙蔭棠1957．『等韻源流』上海商務印書館

龍宇純1968．『唐写本全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』香港中文大学

辻本春彦1986.『廣韻切韻譜』朋友書店
佐々木猛2000.『集韻切韻譜』中国書店
王力1935.「『類音』研究」(『清華学報』第10巻第3期)
水谷誠1979.「『五音集韻』について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第六集)
水谷誠1983.「『五音集韻』における『広韻』と相違する反切について」(『中京大学教養論叢』第23巻第4号)
寧忌浮1994.「『五音集韻』与等韻学」(『音韻学研究』第三輯　中国音韻学研究会)
大岩本幸次2000.「『五音集韻』研究略史」(『東北大学中国語学文学論集』第5号　東北大学中国文学研究会)

(大谷大学専任講師)